

VI. 皮膚科 管理指導医：福山 國太郎

1. 研修目標

皮膚科学は、皮膚の変化、すなわち皮疹を肉眼で見ることから発達した。その後、研究分野の急速な進歩発達によって、最近では分子生物学から臨床皮膚科までを網羅した学問となった。皮膚疾患を理解するには、密度の濃い、しかも広い臨床医学的知識が必要である。病的皮膚を人の病気の一部と考え、全体がそれにどう反応しているかを総合的に学ぶことが望まれる。

2. 研修方略

研修内容

皮膚科医としての基礎を身につけると共に、境界領域の疾患についても正確に対応できる能力を養うように、指導医とともに実地の診療に当たる。

皮疹を肉眼的に詳細に観察し、次いで病理学的にその病変を裏付ける能力養う。疾患によっては、一般臨床検査、更に皮膚科医として必要な技術、検査を駆使する事によって、本態、原因、性格等を明らかにし、それに基づいて基本的な治療法を身につける。研修スケジュールは下記のとおりである。

	朝	午前	午後	夕方
月		初診予診／陪席	パッチテスト・生検	
火		初診予診／陪席	パッチテスト・生検	
水		初診予診／陪席	手術	
木		初診予診／陪席	カンファレンス 褥瘡チーム回診	
金		初診予診／陪席	パッチテスト・生検	

・回診は月～金 13 時 30 分～と 16 時 30 分～行う。

・初診問診では病歴だけでなく所見をとり、上級医の所見と比較し、皮疹の理解を深める。

・皮膚生検・真菌検査・パッチテストなど皮膚科特有の検査を行い、その意義を理解する。

3. 行動目標

(1) 経験目標 (経験すべき診察法・検査・手技)

1) 基本的な身体診察法

① 皮膚病変の診察ができ、記載できる。

2) 基本的な臨床検査

① 真菌検査 (KOH 標本検査)

② 貼布検査

③ ブリック、スクラッチテスト

④ 皮膚生検検査

3) 基本的手技

① 外用療法ができる。

② 皮膚潰瘍、褥瘡の処置ができる。

③ 簡単な切開、排膿ができる。

④ 皮膚生検ができる。

⑤ 熱傷、外傷の処置ができる。

⑥ 冷凍凝固法を実施できる。

4) 基本的治療法

① 外用剤 (ステロイド外用剤、保湿剤、抗真菌剤、抗潰瘍剤など) の作用、副作用を理解し、外用療法ができる。

② 内服療法 (特にステロイド、抗生剤、抗ヒスタミン、抗アレルギー剤) ができる。

③ 凍結療法ができる。

5) 医療記録

- ① 皮膚病変を記載し、撮影できる。
- ② 皮膚病理組織録を作成し、管理できる。
- ③ 慢性皮膚疾患患者への指導録を作成する。

(2) 経験すべき症状・治療

- ① 薬疹
- ② アトピー性皮膚炎
- ③ 皮膚悪性腫瘍
- ④ 皮膚真菌症

4. 評価

- 1) 研修医は、ローテート終了時に EPOC を用いて自己評価を行う。
- 2) ローテート終了時に、指導医及び看護師長（または相当職の看護師）が、EPOC を用いて「研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」により研修医を評価する。